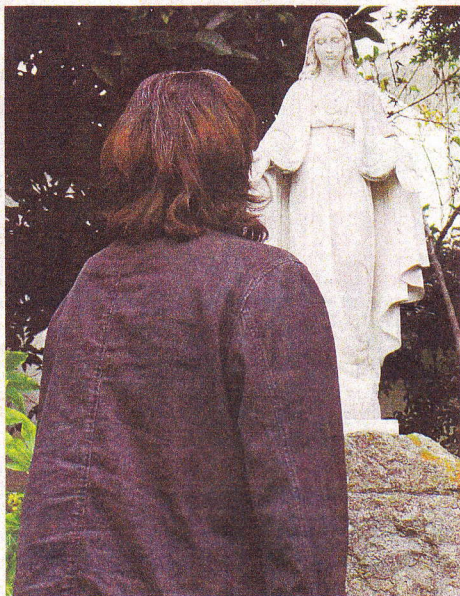


県内の生活保護「働き盛り」急増

山梨県内の生活保護世帯のうち、働ける世代を含む「その他世帯」の割合が2008年のリーマンショック以降急増し、2013年度は85.8世帯に上った。「その他世帯」には、失業後に意欲はあるのに新たな職に就けず、収入を得られないまま困窮に陥った1人暮らしの男性が多く含まれているとみられる。「生活保護を受けるのは気が引けるが、働く場所がない」。最低限の生活を送りながら職探しを続ける男性たちの現状取材した。

〈斉藤裕介〉

引け目抱え、職探す日々



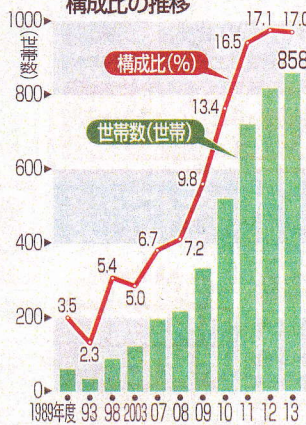
生活保護を受けながら就職活動を続ける男性。「自分が力になれる仕事があればやりたい」と語る。 〓 甲府市内

ズーム 生活保護世帯「高齢者世帯」「傷病・障害世帯」「母子世帯」「その他世帯」に分かれる。「高齢者世帯」は65歳以上の人で構成する世帯または18歳以下の者を含む世帯のことを指す。「傷病・障害世帯」は世帯主

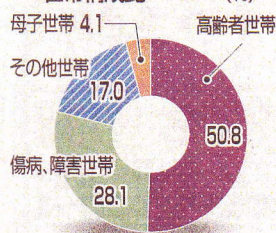
「自分の『筋力』というか、労働者としての力が少しずつ衰えているのが悲しい」。生活保護で「その他世帯」に該当する甲府市の男性(33)は苦渋の表情をみせる。男性は福島県出身。17歳から父が経営する運送会社で働いていたが、20代半ばで会社が倒産。その後、派遣労働者として各地を転々とした。昨年10月下旬、愛知県内で派遣切りに遭い、山梨県に来た。

県内の生活保護状況

「その他世帯」の世帯数と構成比の推移



2013年度の生活保護世帯構成比(%)



リーマン後、年々増加 1人暮らし男性目立つ

車中泊をしながら仕事を探したが見つからず、寒さに耐えられなくなつて同年11月から生活保護を受けるようになった。アパートで1人暮らしをしながら就職活動をする。雇ってもらえそうな業者を見つけて直接頼み込むこともあるが、働く機会に恵まれない。大型車やクレーン車の免許を持たず、年齢も30を過ぎた。派遣で食いつなぐのではなく、定職に就きたい。不安が入り交じる日々。食事は日持ちの良い安価な食材を買って

自炊で済ませる。「自分の体をいじめたいと思うほど仕事が好き」と言う男性。リーマンショックがなければ給与が下がったり、職を失ったりはしなかっただろう。貯金ももう少しあったはずと思う。「税金である生活保護費をもらい続けるのは気が引ける。早く職に就いて自立したい」

と、焦りを覚えながらハロワーワークに通う。だが、仕事は見つからない。分かったことは、「企業は若い人じゃないとだめだ」ということだ。世間では、アベノミクス効果で景気は回復基調だというのが実感はない。ケースワーカーに会うたび、決まり文句のように「早く仕事を」と言われる。「働きたいのに働くところがない。生活保護によって生かされながら、体を持って余す日々だよ」。男性は自嘲気味に語った。

山梨県福祉保健総務課によると、2013年度に県内で生活保護を受けたのは5026世帯(年度平均)で、「その他世帯」は85.8世帯で17.0%。リーマンショック後の09年度は前年度を11.6世帯上回る333世帯(9.8%)、10年度520世帯(13.4%)、11年度721世帯(16.5%)、12年度813世帯(17.1%)と増加の一途をたどった。

「その他世帯」の世帯主には、現役世代の中でも職を失った1人暮らしの男性が多く含まれている。1人暮らしの女性による生活保護の申請は、配偶者をくし、自身も高齢になつてからの場合が多く、この場合には既に「高齢者世帯」に該当する。生活保護の対象となる「働

き盛り」の男性が増加する一方、全国の自治体は生活困窮者自立支援法に基づいた事業の準備を進める。事業は来年4月に始まり、生活保護になる手前の生活困窮者の就労相談などを実施する。生活困窮者の支援に取り組むNPO法人「やまなしライフサポート」(甲府)の中山八十司理事長は、失業後に車中や路上の生活に至った人も同法の事業の対象に含まれることを指摘。中山さんは「職を失い、離婚などで家族の支援が受けられなくなった男性は心のダメージを負っているケースも多い。生活保護を生かした就労支援は欠かせなくなっている」と話す。(斉藤裕介)